

一心寺かわら版

第十一号 平成十九年九月発行

「千の風になって」

昨年からテノール歌手、秋川雅史さんが歌う「千の風になって」がヒットしています。この歌は新井満さんの作で、次のような背景から生まれたそうです。



幼なじみの奥さんがガンで亡くなり、残された幼なじみと子供三人が悲しみに暮れていた。しかし私には、何の役にも立たない慰めのことばを言う以外できることはなかった。しばらくして彼女の追悼集「千の風になって」が作られ、その中である人が「千の風」の翻訳詩を紹介していた。その詩に感動し、これを歌にすれば残された人の心をほんの少しでも癒すことができるのではないかと思った。そこで英語の原詩を探し出し、自己流の日本語訳と曲を付けて歌にし、幼なじみに送った。それが奥さんを偲ぶ会で披露され、みなともに聞き入り、涙を流しつつ歌った。

(千の風になって)

私のお墓の前で 泣かないでください

そこに私はいません 眠ってなんかいません
千の風に 千の風になって

あの大きな空を 吹き渡っています

秋には光になって 畑にふりそそぐ

冬はダイヤのように きらめく雪になる

朝は鳥になって あなたを目覚めさせる

夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください

そこに私はいません 死んでなんかいません

千の風に 千の風になって

あの大きな空を 吹き渡っています

千の風に 千の風になって

あの大きな空を 吹き渡っています

この歌に対する反応は多数寄せられていますが、宗教界にとっては賛否両論のようです。

六月二十日の新聞記事には、「私は墓にいない、死んでなんかいない」という表現は、日本人が共有してきた仏教的な死生観とは異なる、違和感を表明する仏教関係者もいる。」とありました。浄土真宗は昔から、故人はお墓の下にいないということを書いてきたためか、あまり反感は聞かれませんが、この短い詩をどう受け取るかは一様ではないようです。

東京大学宗教学教授の島菌進氏は、「現代は家や親族、地域などの共同体の機能が失われている。死者との交わりが個的になり、痛みや悲しみ苦しみも個々人で抱え込んでしまっている。そうした時代を生きる人たちには、「風になって空を吹きわたっている」死者との交流がストレートに胸に響くのだろう。「千の風」の世界は、風通しが良くて広々としている。でも同時にさびしきを感じてしまう」（要約）と述べておられます。

確かに「千の風」は素晴らしい歌であり、浄土真宗のみ教えに通じているところがあると思います。人生を終えた方が風になっているということは、確かに近くにいるように感じられて嬉しくはあります。しかし、その風は私にとってどういう存在でしょうか。ただ身近にいるというのではなく、その方が、人生を歩む私の上に真実を開いてくれる存在「仏」として受け取っていくのが浄土真宗です。前号にも書いたように、「仏」とは、かぎりないのちのはたらきを持ち、大きな慈悲ですべてのいのちを救うべくはたらく存在です。つまり仏さまとして手を合わせるところに、人生を終えた方が仏のみ教えを通して私に語りかけてくることばがあり、届けられる慈悲の心が感じられるのでしょうか。

真宗僧侶、西脇顕真氏は同じ英語詩を「千の風」限りないのちに包まれて」として訳されています。そこには原詩にない「あなたは大きないのちに包まれているのです わたしに会いたくなくなった時ナモアマミダブツと呼んで下さい わたしはいつでもあなた

のそばにいます」との一節が入っています。「南無阿弥陀仏」のころを表現されたものでしょう。

また西脇氏は、「お墓の前で泣かないでくださいというのも素晴らしい言葉ですが、仏さまは、泣きたいだけ泣きなさい、悲しい時は泣きなさい、いつでもそばにいるから安心なさい、と呼んでおられます。

仏さまは、悲しい時は悲しいままに嬉しい時は嬉しいままに、大悲の風となって私を慈しみ、智慧の光となって私を導いて下さっています」とおっしゃっています。

南無阿弥陀仏をとなふれば 十方無量の諸仏は

百重千重圍繞（いによく）して よろこびまもりたまふなり

（浄土和讃）

真宗のことば①「他力本願」（たりきほんがん）

めぐちゃん「ねえ、ねえ、お父さん。他力本願ってなあに？」

父さん 「なんだ、むつかしいことを聞くなあ。そんなこと他人まかせにしないで、自分で調べなさい。」

めぐ「あつ、あつた。他人の力をあてにすること・・・」

父 「そつ、そつだよ。他人まかせにすることを、〈他力本願〉っていうんだよ。世の中、何でも自分で努力しなくっちゃ。

他人の力をあてにするなんてダメなんだ！」

めぐ「でも、もう一つ意味があるよ。仏さまの力・・・って」

父 「ああ、そんなこともいうなあ。おまえも受験するときは、

ちゃんと合格祈願にいかないとなあ。実をいうとお父さんも、宝くじを仏壇にお供えしているんだ」

めぐ「それって他人まかせじゃないの？」

じいちゃん「おいおい、おまえさんたち、願い願いつて自分たちの願いのことかい。〈他力本願〉っていうのは仏さま

からの願いなんじゃよ」

めぐ「ええつ、仏さまの願い？」

じい「そうじゃよ、仏さまはすべての人を、必ず救いたいと、願われているんじゃよ」

めぐ「すべての人って、私のことも？」

じい「そうじゃよ。おまえのことじゃよ。迷っている人を必ず救うというのが仏さまの願いなんじゃよ」

めぐ「ふん。でも、私、迷ってなんかいいわよ。迷いつてなあに？」

じい「わたしの願いは、かなわなくても、かなってもキリがないんじゃ。それを迷いというんじゃよ」

父「そうだなあ、願いにキリがないっていうのは分かる気もするけど、自分ではなかなか気がつかないよな。なあ母さん」

母さん「そうねえ。でも、気がつかないっていえば、朝日が差し込んでいるところだけにホコリが舞っていてビックリすることがあるでしょ。何もないと思っただけでも、光に照らされて、初めて見えてくる、迷いつてそういうものじゃないかしら」

めぐ「私、いつもお掃除してるモン」

じい「ハハハ、掃除のことじゃないよ。仏さまの願いに照らされてホコリだらけの自分に気づかされるんじゃよ」

父・めぐ「ホコリを照らす光かあ」

「他力本願」という言葉は、浄土真宗において、み教えの根幹に関わる最も重要な言葉です。

浄土真宗の宗祖である親鸞聖人がいわれた「他力」とは、自然や社会の恩恵のことではなく、もちろん他人の力をあてにすることもありません。また、世間一般でいう、人間関係のうえでの自らの力や、他の力という意味でもありません。「他力」とは、そのいずれをも超えた、廣大無辺な阿彌陀如来の力を表す言葉です。

「本願」とは、私たちの欲望を満たすような願いをいうのではなく、阿彌陀如来の根本の願いとして「あらゆる人々に、南無阿彌陀仏を信じさせ、称えさせて、浄土に往生せしめよう」と誓われた願いのことです。この本願のとおり私たちを浄土に往生させ、仏に成らしめようとするはたらきを「本願力」といい、「他力」といいます。

私たち念仏者は、このような如来の本願のはたらきによる救いを、「他力本願」という言葉で聞き喜んできたのです。ここにはじめて、自らの本来の姿に気づかされ、いまのいのちの尊さと意義が明らかに知らされるのであり、人生を力強く生き抜いていくことができます。

「本願寺パンフレットより抜粋」